

明治期における岡山・倉敷の信徒の交わり

——大原・石井・林の三家の場合——

はじめに

竹 中 正 夫

明治のはじめ、キリスト教がわが国に伝えられたとき、それを受け容れた人々は、ごく少数の人々であった。彼らは、キリスト教を受容し、新しい価値観に立って、自己の事業を通して社会の中でキリスト者として努力をなしていた。それはあまり安易な道ではなく、文字通り荆棘であった。彼らはその中で一人で歩むのではなく、信仰にある友人たちの鞭撻や慰めや励ましの中に自分を鍛え、他者に仕えていった。彼らは小さな交わりに属していたが、その交わりによって信仰を支えられ、信仰によって交わりを豊かにしていたように思われる。本稿は、明治期の岡山・倉敷における大原孫三郎・石井十次・林源十郎の三家の交わりを記述しその実体を検討したものである。

本稿は本研究会の「教会研究」の一環としてなされている倉敷教会史研究の一コマであり、さらに大正・昭和にわたってこうして研究をすすめてゆきたいとねがっている。

同心戮力

同心戮力は倉敷紡績株式会社のモットーである。明治二〇年に同社が創立されたとき大原孝四郎が社長となり、

木山精一、小松原慶太郎、大橋沢三郎と林醇平の四人が取締役となった。場所は市場町で昔の代官所の前、現在は倉敷紡績歴史記念館があり、アイビー・スクエヤーの大事な一部として多くの人々に親しまれている。このころ、よく林醇平は父にあたる林孚一のとこりに朝晩やって来ては、座談をして帰るのをつねとしていた。大体、三十分から一時間位、あるときは世間のよもやま話であったり、あるときは立ちいった相談事であったりした。林源十郎（I）はそのころ二才でその席にあってお茶をすすめるのが彼の役目であった。ある晩、いつものように醇平がやって来てその日に大原社長が会社に来て語ったことを伝えて、「自分も社長として時々会社に来て、工場の内外を見て廻ることがあるが、アチラに古金があるがっていたり、こちらに木や板きれがほってあり、縄屑や紙片がちらかっている。一々これに自分が干渉して片付けを命ずるなら、社長がたまに出て来てソナな世話までといわれるに相違ない。しかし、わたしとしては、これを見過すのは甚だ心苦しい。それ故に今後は今までのように工場には参らぬことにしたので、皆さんが協力一致して宜しいように御経営下さい。その意味で西毅一先生に額字をお願いしましたら、同心戮力の四字を書いて下さいました。この額を事務所に差上げますから掲げておいて下さい」。それを傍で聴ていた林源十郎（I）はそのときの印象をこう記している。

以上を話し終りました叔父が感激に充ちた顔は今も尚私の新しく記憶に存する処でありまして、それから祖父が叔父に対して諄々と申し聞かせました。我子に対する慈愛の教訓も亦側で聞いておりました私の将来の教訓として有り難いものでありました。

林源十郎は、自分の仕事においても、この四字の精神が肝要であることを痛感し、かねてから尊敬している原澄治に依頼して同心戮力の四字を揮毫して貰って、本店、支店、工場に掲げるようにしている。さらに、林は、キリスト

者としてこの四字の精神を聖書の基盤においてとらえてこうのべている。「さらに、私の考へます事は、会社や商店のみでなく、同心戮力の必要なのは神の国拡張事業である教会において、更に一層切実なものであると考えるのであります。コリント前書一二章に教えられたるように一人々々与えられたる立場、才能によりて働きは異に致しましても、一致協力、御事業に対しては一つになりて努めねばならぬと感じます次第であります。」

「同心戮力」の文字は春秋左伝にある盟誓のことばであるが、林はここに「もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」(コリント第一・一二ノ二六)というキリストのからだのたとえから、このことばを再解釈して教会においても、このことばが神の国のために具現されるべきことを説いている。

倉敷の町と教会の進展を顧みる時、この言葉は大切な意味をもっている。とくに大原家・林家・石井家の人びとが不思議なかかわりから、聖書の教えにふれ、互いに心を一つにして協力して人々のしあわせのために尽力したことは注目すべきことである。いましばらくその三家の背景とそのめぐりあいの過程をふりかえってみることにしよう。

益者 三友

大原孫三郎は「益者三友」として、自分が信頼し自分に益をもたらしてくれた三人の友人をあげている。

真友・自分の短所を指摘し、親切に直言する友として森三郎

諒友・真実で表裏なく、信頼しうる友として林源十郎

識友・世間の事理に通じ、それを教える友人として山川均
があげられている。¹⁾

森三郎は静岡県遠江の国の天竜川ぞいの農家の出身で大原より一才年上であった。大原が東京専門学校時代の友人で、麹町の望遠館で同宿であった。かれは当時東京帝大の農学部の学生であり、のちに千葉農事試験場長になった人である。森は、足尾銅山に大原をつれてゆき、公害汚染のいかにおそるべきかを説いた。大原が、学業を中途でやめて帰郷すると、かねてから愛読していた二宮尊徳『報徳記』と『二宮翁夜話』をわざわざ大原に送って、そこから学ぶところが必ずあるであろうと説いた。案の定、これは大原に大きな影響を及ぼすようになった。

林源十郎は大原より一五才年上であったが、大原が小さいときから最もたよりにしていた人であり、何くれとなく彼のところを訪ねては、相談をしたり、意見をきいていたりした。林がなくなつたあと、大原は追憶の言葉としてこのべている。

林さんと相識りましたのは、倉敷で慈善音楽会をを催ほしますときで、それから親しくなり毎日のように林さんの家へ遊びに行くようになりました。それは丁度私の二十才前後のときのことですから、その頃、林さんと一五・六才も年令が違うことは随分違つて思えるのですが、それでも林さんは決して私を子供扱いにせず、立派に友人として交際して下さいました。随分とお忙しいところえ而もいつも遊びに行くのに、林さんは厭な顔一つせず、いつも心から親切にして下さいました。(中略)私のことを、お母さんと共に祈つて下さつた人でした。何から何まで細心な注意を払つて、あれこれと指導して下さいました。まだ若かつた私を、一人前に扱つて下さつたのも林さんその人でした。林さんは私の若い日になくてならぬ大きな存在だったので。私が今日、かうして社会のため、お国のために、多少でも働くことの出来るのは、全く林さんから受けた感化の賜であると言つても良いのであります。

林源十郎は、林孚一の孫で幼くして、父を亡くし、祖父の影響を受けて育った。伝来の家業、薬種業を営み明治二年キリスト教に入信し、倉敷教会の設立者の一人となり、町のため教会のため、陰に陽に貢献した。

第三の益友としてあげられている山川均は、大原孫三郎と同年の生れであり、小学校の同級生であった。ほかに八浜屋の啓さんといわれた少々理屈屋の藤波啓太郎、円満で常識家の山本の兵さんこと、山本兵一、女教員の弟で秀才型の藤井、それに中庸の徳を身につけていた木村光二や、文才のあった高戸猷などが級友であった。光二は、倉敷教会の創立者¹和吉の息子であり、のちに郵便局長となった。高戸猷は林商店につとめ、また倉敷教会の役員として尽力し、とくに、創立三十周年にあたり倉敷基督教会²を編集して功績は大きい。大原は小学校時代画が得意であったが、山川均は俊敏な頭脳の持主で、算術・国語、そして理科・地理・歴史なんでもずばぬけてよく出来て、みんなの注目をひいていた。のちに大原は東京に出て勉強し、山川は京都の同志社で学ぶようになるが、両君の交遊はつづいた。山川が明治三三年に守田一人と共に発行していた、「青年の福音」の一文が不敬罪にとわれて、三年六月の重禁錮刑に処せられたとき、多くの人々は非国民扱いをしたときにも、大原孫三郎はそつと旧友山川均を巢鴨監獄に訪ねている。山川は自伝にその友情をこう記している。

出る時には、教誨師がかたどうりもうちど別室で訓戒をあたえたあとで、倉敷の大原孫三郎という人を知っているかたとたずねた。このとき私は初めて、三十一年のころから全く交りの絶えていたこの旧友が、獄中の私を訪ねてくれたこと、しかし親戚いがいの者には会わせない規定のために、面会は許されなかったことを知った。当時獄中に私を訪ねることは、好意のほかに、そういう勇氣が必要だった、私は旧友の友情に心から感謝した。⁴

両者の道はそれぞれ異っていた。山川は日本の社会主義運動の先駆的な働きをなし、大原孫三郎は倉敷紡績の社長

となり産業界・財界の指導者となった。大原は山川の意見に耳を傾け、彼の主宰した『平民新聞』や雑誌『新社会』や著書『農村問題の真相』などを熱心に読んでいた。彼がのちに慈善事業から、社会の構造的な問題の研究に眼をむけ、大原社会問題研究所を設立したのも山川均の影響があったと考えられる。山川は、大原を評して「敬堂は、本来は実業家で大小会社の社長を勤めていたが、一方では金を社会の幸福増進のために使うことを忘れなかった。米国流の近代的実業家が、敬堂を以って、初めて日本に現われた。」と評した。

この三人の友は、それぞれ大原孫三郎の生き方に少なからぬ影響を与えた。森は二宮尊徳の報徳思想を通し、林は聖書を通し、そして、山川はその諸論説を通して彼の基本的な考え方を培った。孫三郎の伝記の作者である犬飼亀三郎は、その影響についてこうのべている。「敬堂は、その三人が勧めてくれた書物を読んで何を自分のものにしたか、それは約言すれば、人の踏み行うべき道と、金持ちの心得と金の使い方とであった。」
いま二宮の著作と聖書から敬堂が愛読していたことばを列記してみよう。

二宮尊徳の書物から、

- 一、今その過ちを知れり、然らば過ちを補わんことをつとむべし。〔報徳記〕一)
- 一、節儉を以って冗費を省き、有余を生じて他の艱苦を救うべし。〔報徳記〕二)
- 一、書を読み、これを行はざるものは鋏を買って耕さざるに同じ。〔語録〕七六)
- 一、他に譲ることは人道なり、鳥獸には譲るの道なし、一石身代の者は五斗にて暮らし、残り五斗を他に譲るべし、雇われ人は、給金の半分にて生活し、残り半分は今後のために譲るべし。譲る相手は、子孫、親族、朋友なり。その上は里と国のために譲るべし。これ富者の道なり〔夜話〕三)

一、富者には富者の務めあり、勤儉して余財を他に譲り、郷里を富まし、土地を美しくし、国恩に報ずることを心得るべし。〔夜話〕四)

一、聖人は、無慾なりと見ゆれども、その実は大慾にして、その大慾は正しきものなり。この大慾とは万民の衣食住を充足せしめるために、人間に大福を集めることを言うなり。国を開らし、物を生み、衆庶を救済し、社会の幸福を増進するにあり。その欲するところ、豈正大ならずや、能く思うべし。〔夜話〕五)

聖書からは、

一、木は果によりて知らるるなり。善き人は、善き倉より善き物を出し、悪しき人は、悪しき倉より悪しき物を出す。人の虚しき言は審判の目に正さるべし。(マタイ二ノ三三―三五)

一、富める者の神の国に入るよりは、ラクダの針の穴を通るは反って易し。(ルカ一八ノ二五)

一、善を行うことを知りて行はざるは罪なり。(ヤコブ書四ノ一七)

一、善を行うて倦むことなかれ。(テサロニケ第二ノ三ノ二三)

一、汝この世の富める者に命ぜよ、高ぶりたる思を持たず、定めなき富をたのみず、善き事を行ない、善き業に富み、惜みなく施し、分け与ふることを喜ぶべし。(テモテ第一六ノ一七―一八)

一、汝等も働きて弱き物を助け、またイエスの言い給ひし、「与うるは受くるよりも幸福なり」の言葉を記憶せよ。(使徒行伝二〇ノ三五)

孫三郎はこれらの言葉を暗記するほどよく読むと同時に、実行するようにつとめた。

信 仰 の 友

林源十郎は聖書を大原孫三郎に紹介したのみでなく、石井十次を大原に紹介し、さらに、彼の結婚にあたって、そして息子総一郎の縁談にあたって骨を折って世話役の労をとった。大原孫三郎は明治三八年七月三十一日、倉敷で洗礼を受け、翌三九年の倉敷教会の設立者の一人となっている。これらの働きを辿ってみるとつぎのようになる。

大原は林と最初に識り合いとなったのは、慈善音楽会であったという。これはおそらく、岡山孤児院が明治三二年七月一日と一六日に倉敷で催した音楽会であったと思われる。木村和吉、大橋良平、浅野義八、林源十郎の四人が世話人となり、倉敷尋常小学校々庭で催され、一晚に二、五〇〇人の人が集っている。このとき大原は一九才、東京専門学校に在学中で、一方では可成りよく遊んでいたようであるが、他方では将来を思うと探求の日々を送っていたころである。このときの石井十次の話に感銘をし、大原は同年一月一九日石井を訪問している。石井の日記には、ただ「大原孫三郎氏来訪」とのみあり、他に何ら記されていない。おそらく石井は多忙のあまり大原の訪問に十分応ずることが出来なかったのかと思う。さらに翌三三年の石井日記をみると、

四月八日

(三) 倉敷大原氏来訪、広瀬久馬氏の学資金五、〇〇〇を渡し、その成年となりし記念のため何か学校に必要なものを寄附せんと語らる。よって「器械体操」を乞えり、直ちに承認。

とある。これまでは石井と大原の間にさして深い交りがあったようには思われなかったが、一〇月二五日に石井の信仰の友である林源十郎が大原を伴って岡山孤児院をたずねたところから親密さが増している。あいにく、石井は留守中であつたが、「男子部食堂において牛肉をおごり、共にも麦飯を食せらるる」と石井は記している。この日から大

原の訪問は表面的なものでなく、孤児院の実状にふれ、子供たちと一緒に食事をしていくことが屢々となっている。

十一月二二日

三、大原孫三郎君山本君来院、大原大人の角力見物をやめて孤児院の子供等に寄付されし御施走会に列し共に昼飯を食して去らる(中略)

四、夕飯……(中略)大原氏と共に女子部にて共食。

十二月二〇日

五、大原孫三郎氏、林源十郎兄と共に来院、大原氏の寄付にかかる牛肉を共食せらる。(中略)

大原はこのころより、岡山孤児院によく出入りするようになり、毎月御馳走会を催している。三四年二月五日の日記をみるとつぎのように倉敷の基督者たちの訪問が記されている。

二月五日

大原、木村、林、浅野、岩谷姉来訪、共にも大原氏施走の牛肉会に列す、あとにて大原二、木村一、林一、浅野の氏一、併せて金五、〇〇〇のみかん代の寄付あり、(中略)あとにて大原氏は一一時過迄談話。

この年には石井は、林の仲介によって大原孫三郎と親交を深め、三人はキリスト教の信仰による真友となった。その年の暮に石井は日記の所感でこう感謝している。

十二月一七日

六、所感、予は昨年来林、大原の二兄を友として与えられて新しき世界に入りたるの心地せり、……之れ真に凡てに優れる賜物なり。

明治三四年の石井の日記によって、三者の交流をしらべてみると、その年だけで、石井は大原に二八回会っている。はじめのうちは、大原が林と共に岡山孤児院を訪ねているが、同年の後半になると、石井の方から大原を倉敷に訪ねている。訪問の際に語られた主な事項は、

一、岡山孤児院のこと（同年三月九日大原孫三郎は岡山孤児院基本金管理者となっている。）

二、大原孫三郎の結婚のこと（林と石井の世話によって、同年一月一日、大原は広島県深安郡深津村の石井英太郎四女寿恵子と結婚している。そのあと一二月一日夫妻で岡山孤児院を訪問している。）

三、菅家のこと（菅之芳は石井の岡山医学校時代の恩師であり、一時彼は菅の家に世話になっていた。石井は菅の家の財政の破たんを救うため、林・大原の助力を仰いだり、医学校内の問題で菅の立場を擁護している。）

林を媒介にした石井十次との親しい交りの中で、大原は石井の献身的な働きをまのあたりに見て、感銘を深め、このような働きは神の意志でなくては到底出来ないことを悟り、岡山孤児院は神の業であり、それを助けることが自分の天職であると信じるに到る。大原は日記につきのように記している。

バックストンは、岡山孤児院は神の御心により設立された孤児院であると言ったが、真に御心によって設立されたものなる事を信ずることが出来る。人間以上の神様でなくば、かくの如くにはいかぬであろう。石井氏は特に神が選び給ひ、孤児院を設立せしめられたのである。余は神の御心によって設立された孤児院にはできるだけ尽力せねばならぬ。余は全く神の御心によって生れ、生きる者であるから、御心によりて設立された孤児院に尽すべきは、これまた余の第二の天職であると信ずるのである。……即ち余と岡山孤児院は一物一体たるべき責任があるものである。余はこれまで岡山孤児院について、その神の御心なる事を知り得なかつたのであるが、余は今ここにそ

の軽卒なる観察を謝すると共に、余は今更の如く以上のやうに感ずるのである。⁷

この日記の月日は不明であるが、石井十次の明治三五年六月三日の日記に、「大原君来院、岡山孤児院に神の事業なることを悟れり。之れを助くるは予が第二の天職なることを悟れり云々と所感を述べらる。」とあるから、そのころのことと考えられる。孫三郎二一才のときである。

明治三五年は大原にとっては新しい出発の年であったといつてもよい。前年の暮に、石井と林の世話によって結婚するし、新しい年を迎え、従来の生活を反省し、キリスト教の信仰と二宮の報徳思想を体して、社会のために尽すことを決意していた。その年の元旦を迎えて大原はつぎのように抱負を記している。

余は昨年よみがえりて、この元旦を迎えることを得たるを感謝す、過去この五年間の事を顧みれば、実に恥しく感ぜざるを得ない。然るに昨年は、二十世紀の第一年において、余の心靈上に大なる改良を加えさせ賜うた。この二十世紀は、余にとって改革の世紀であると思う。謹んで神の御心に随つて、余の一心をこのために捧げんと思う。過去五年間、父母が余の将来を心配しながら、毎年の元旦を迎えられた所感は、如何であつたであらうか。余の不行跡を省み、その当時の新年と、妻を与えられてから迎える今日の元旦の気持は、実に悔恨に堪えぬ。

この年、大原はひきつづいて足しげく石井十次を訪ね、その事業を後援すると共に、教えをうけている。石井の日記にあらわれただけで明治三五年中に両者の会合は四二回に及んでいる。石井は、「林・大原二君を友として与え玉いしことは予に取りては無上の天賜なり、天の賜の中：真正なる朋友に優る賜はあらずと予は思ふなり」とのべている。従来岡山孤児院の仕事を支えていた香登の有力なキリスト者増田孝四郎は明治二七年に、武用五郎兵衛は明治三〇年にそれぞれなくなり、石井にとって寂寥を覚えていたときに、三二年より大原・林をはじめ倉敷の同志たちと

の交流が生れ、石井は何ものにもまさる感謝の念をあらわしていることがうかがわれる。この年に特筆すべきことは、先述のごとく大原が石井の姿にはげまされ、自分の財産も自分のために用うるのではなく、岡山孤児院のため、また世界のために献げようという決意を表明したことである。明治三五年の三月一五日の大原の日記によると、

余に、この資産を与えられたのは、余の為にあらざ、世界の為である。余に与えられしにはあらざ、世界に与えられたのである余は、その世界に与えられた金を以て、神の御心に従って働く者である。

内にめばえた隣人のために働こうとする決意は、次第に外に対して眼に見えて行動となってあらわれていった。教育の面では倉敷教育懇話会（三五年一月）、財団法人倉敷奨学会の結成（三五年六月）、そして社会啓蒙活動としての倉敷日躍講演の開設（三五年二月）などがあげられる、これらの働きはのちにつづく大原の社会的な活動の基礎をなすものであり二二才という若き日のひたむきなパトスと石井によって燃やされた人道主義的なキリスト教の精神に源を發したものであった。

つづいて明治三六年の石井の日記をみると、石井と大原の交流はつづいてさかんになされている。その会合数をみると、二八回に及んでいる。前年からの傾向として、岡山孤児院を訪ねたとき、大原が感話をのべたときのことと記されている。これは、ただ訪問し石井の話しをきいて、その事業を財的に支援するだけでなく、積極的に自分の所信を院生に語っている。その内容については詳しくはわからないが、石井日記から推察されるところによると、二宮尊徳の勤儉貯蓄についてなされているものが少なくない、そのころ、かつて岡山教会の牧師であった金森通倫が「貯金のすすめ」を出版し、石井も購読しており、大原も石井もこの点には共鳴していたことが判る。石井の日記から引用をしてみよう。

明治三五年一月二十四日

(四) 大原君来院 勤儉貯蓄につきその祖父、父上の事歴につきて談話、十一時の夜行にて帰らる。

一二月一日

(一) 朝集会、武田氏の満五年紀念会を開らく、溝手君の感話、(二) 菅夫人来訪、「貯金のすすめ」買求むことを勧め、(三) 大原君来訪、一、二ノ宮尊徳先生につきて、二、貯金教育につきて、三、日躍講演につきて、四、禁煙と貯金につきて、五、孤兒院の経済法につきて語り且つ徒歩して松垣氏並菅内を歴訪し、六時帰途再び共飯して帰える。(所感) 今日之如く「ゆっくり」と快談せしは近来珍敷かりき。蓋し昨年之今日は大原君夫婦来院共々公会堂にて会合せしの日なり。

大原は同年二月二十九日に報徳記五冊を岡山孤兒院に寄附している。その前日には「大原君本日より煙草をやめらる」という記録もみられる。大原は翌明治三六年二月二〇日、岡山孤兒院を訪問し、四時より「教育会」、七時より「貯金奨励会」が開かれ、大原は奨励演説をしている。そのあと、石井は、「己でに賃金を得るに至れるものは必ず貯金をなさざる可らずとの規則を定む」と記している。

石井もこうした大原の考えに賛成し、「労働、賃金、貯金、自治を以て根本教育となさん」とのべ自らも貯金を実行してこう記している。

明治三五年二月一日

(四) 本日去月二十日より貯金し始めたる「星の玉」を破りしに金三、〇〇四……ありき由って之れを二十二貯蓄銀行に預く……之れ予が生れて始めての貯金なり。

また、同年十一月二五日の日記には、

一、「勤儉貯蓄」と云ふ小熟字を改めて、……「労働貯蓄」となさざる可らず、二、拜金的貯金を奨励するは不可なり——根本的に労働して金を得、金を得たらば、必らず其幾分を貯蓄しをき、他日の必要を備ゆると云ふ心を養成せざる可らず、習慣を与えざる可らず。三、労働貯蓄の精神を教育せんがために自今小学校より活版部に通勤するものには一定の賃金を与ゆるの方針を採らざる可らず、四、毫も自己のことを思ふ勿れ、考ふる勿れ、ただ兄弟のため姉妹のために考え、又た働くべし。それ天意をなす所以也。¹⁵⁾

このころ出版された金森通倫の「貯金のすすめ」を読み、「労働と貯金とは人間教育の両翼なり」とのべ、院児たちに労働の報酬として賃金を払い、貯金通帳を与えたりして「乞食本位」になりがちな岡山孤児院を「貯金本位」となすようにつとめていた。¹⁶⁾

なおこれは多少余談となるが、明治四四年四月二二日、金森通倫は内務省囑託として岡山県の巡回講演の途次倉敷に來たことがあった。たまたま倉敷を訪問中の組合教会牧師高橋卯三郎は金森を旅館にたずね、その印象をつぎのように記している。

「備中倉敷に來れる折柄、当時内務省囑託にて民政講話のため当地に來りおらるゝ金森通倫氏某旅館に滞在せらるゝと聞き、早速宿を訪ふ。金森氏は予が同志社にありし頃、牧師として予の心靈上に少からざる指導を賜はれる人なり。爾來相見ざること殆んど二十余年、今や久し振りに相会したるが、相語る時間少なうして十分に懇話することを得ざりしを遺憾とせり。然し氏が目下の働きを聞き、又問に応じて予の事業を語りぬ。氏の談によれば、今年一月に東京を出られ、岡山県下を巡視して大抵一郡に一兩度の講話をせらる（金森は明治三三年から大正二年の五月まで、

世界一七か国の貯金の表を造って勤儉奨励運動のため全国を巡回していた。明治四二年の夏から内務省囑託となつた。一講話は大凡二時間半を要し毎日続けらるゝなりといふ。氏は岡山県に赴き、本夏八月頃まで巡回の予定なりとの事なり。八か月間ブツ通しにて、一日に一兩回、然も二時間余の講演をせらるゝ氏の気力は実に驚嘆するに堪へたり。予の如きも巡回中は毎日少くとも一兩回、多きは三四回の講話をなすも、大抵一時間内外にて終れば、到底氏の長時間には及ばず、また予の聴衆は少きは十数人、多きも二百以上に上りたることなきに反して、氏は少くとも七八百、多きは二千以上の聴衆の前に長広舌を振はるゝなれば、其の精力や蓋し察するに余あり。直接氏には聞かざりしも、知る人の話によれば、氏は近時厳正なる禁酒禁煙家なるのみならず、二食主義、然も肉食主義を取られ、且時間の励行と利用とに最も注意せらるゝとぞ。げにや見るから、ツメ襟の古洋服に半ズボンの軽装、こは自転車巡回の爲によるべけれど、また其服装のまゝにて講壇に立たるゝとの事なり。されば氏が目下勤儉の講話者たるのみならず、其の実行者たる風采は一見して察知し得らるゝ也。予は嘗て信仰経歴談中に氏より羅馬書の講義を受け、信仰の基礎を形づくられたることを話したりしたが、其の後氏はある事に憤激せられ、一時極端なる自由基督教となられ、新神学の先駆者たる地位に立たれ、其の後素行上にも多少の非難を受けられし事もありしが、予は其の頃より、これ決して氏が本領にあらず、一時何等かの情によりて斯の如き軌道に走られしも、氏が何時までも斯の如き態度にあり得る人にあらざることを期待したりしが、果然氏が目下の励精克己の精神は、凡俗宗教家等が口に宗教的修養を説きつつ、然も何等の実力なきに比して、数等の上に出づるものあり。わが恩師がここに其の性格の本領に復帰せられしを見聞して、実に感謝措く能はざるものありき。聞く氏は先般某牧師に面会しての談中、予にしてもし再び基督教を説かば、厳正なオルソドクスを以ってせんのみと語られしとか。其真偽は知らざれども、氏の性格上左もあるべしと

予は首肯したりき。兎に角氏も我が国人の精神界の改新の為に日夜東西に奔走して其の力を尽されつゝあり。予もまた同じく東西に巡回して心靈界の為に微力を致しつゝあるの途次、偶然にも二十年振りにて相会見するを得て、実に一種の深き感慨に充たされざるを得ざりし。願くは氏の事業の上に神の恩寵の加はりていよゝゝ元氣に國家社會の為に其の身心を致されんことを祈る。」⁽⁸⁾

かつては、新神学に走つた金森ではあつたが、敬虔な信仰にたちかえり、勤儉質実な生活を自ら実行しつゝあつた金森の姿がうかがわれる。さらに下つて大正二年の石井十次宛の書簡をみると、幾多の遍歴のうちに純朴な信仰に帰りつつある金森の心境がよくわかる。

「石井君、僕も多年の間くらし死のかげの谷を通りました。実に恐るべき道をふんで居りました。しかしその死のかげを通る間も、神は少しも愛の御手をゆるめ給はず、昨年は僕の目の前より最愛の者を取り去り給ふて僕をして永き間の眠りよりさめしめ給ふたのである。さめて誠におどろいた、自分の身がいかなる危き地位に立て居りしかを。誠に神はほむべきかな。神はたしかに昨年不幸をもつて僕を死のかげより救ひ給ふた。今は再全く生れかはりて嬰兒の如くなりて神につかへて居る次第であります。

石井君よ、僕はもうすべての世の中の議論や理窟をすてて単純なる最初の信仰にたちかへりました。神は愛の天父である事、キリストは私のために十字架に死し給ふたこと、私は罪人中の大罪人である事、私はたしかに死後には罪のために地獄に落つべきはづであつたこと、今は救はれて天国の民たる事、以上の単純なるキリスト教の根本真理を僕は今更の如くに信ずるようになった。是まで随分哲学上の議論をしたり、科学上の批評もやつて見たがだめですよ。我々を死より救ひうるものはそんな議論や批評ではない。只以上の根本真理の深さの見へなかつたことを只おど

ろいて居るのみ。

石井君僕はいよいよ決心した。来年一月一日を期して全力を人の魂のためにつくす積り。もう余命を全く此の一事に尽すつもり。今我が国には内地に於て旧新合せてキリスト信徒と称するもの約二十万人ある。然るときは未だ信ぜざる四千九百八十万人に用がある。僕はこれより全力をこの未信者の救ひのために尽すつもり。既に其の準備もなつたのでいよ／＼来年一月から始めます。今度こそは死力をつくすかくごである君よ喜んでくれ給へ。君には再び此の世で合ふか、合はぬか分らぬ。それはしかしどちらでもよい。神が此の世で合せ給ふなら、又合ふことがあるだろう。しかし神のおぼしめしがそうでなければ、いづれ天国で神の前で合ひませう。君が先きに行つて待っていてくれるか僕が先きに行くか、それも分らぬ。いづれにしても只分れるのはしばらくの間のみである。しかし居る所は天地のちがひがあつても志は一つだらう。君も亦五千万の同胞の救はれんことを熱禱して居られるだらう。君よ、君よ、僕の中からはまだ大丈夫。もし神が許し給ふならば、此の後なお二十年や三十年は活動ができると思ふ。今年は五十七歳なれども、いよ／＼元氣は昔日君と岡山で三綱領を書いた時の元氣に帰った。全く生れかたった一青年になつたつもりで居る。君もどうぞ最初の單純なる信仰をもち給へ。我々を救ふものはキリストの十字架のほかなし。議論は入らぬ。理窟は入らぬ信すべきはキリストの十字架、たよるべきはキリストの十字架、望むべきは天国の福である。僕は今では此の世に就いては死んだものと心得て居る。まだ肉体には居るけれども、もう肉の世界には生活せぬつもり、全く靈界に生活するつもりで居る。お互に最初の單純なる信仰にかへり、神を愛し、キリストを愛し、天国を望んで進みたまきものである。此手紙は君の上に神の祝福あらんことを祈りて送る。

大正二年十一月六日

石井大兄⁽²⁰⁾

先述のように、石井は二宮尊徳の倫理思想に共鳴し、あるときは「大原君をして二十世紀の二宮金次郎たらしむ可し」とさえ云っている。

さらに、しばらく後になると、石井は二宮の報徳思想とキリスト教との融合を考へるようになる。それは、明治四二年以後の「基徳教」の主張である。このとき、石井は茶臼原にあって、高鍋上江の両村長・両小学校長・郡立農学校長や両町村有志などと弘道会という組織をおこし、石井はその顧問となっている。その意とするところは、「聖書をもって家庭を潔め、報徳記を以て町村を潔めたい」というものであった。そして主の祈りを解明してこのうべている。

九、天に在まします我儕の父よ。願くは爾名を崇めさせ給へ。十、爾國を来らせ給へ、爾旨の天に成る如く地にもなさせ給へ。我儕の日用の糧を今日も与へ給へ、十一、我儕に負債ある者を、十二、我儕が免す如くわれらの負債をも免し給へ。

とある聖語がそれである。殊に一一、一二の両節に根拠がある。すなわち「日用の糧」とは従来の教会にては、精神上の糧と云ふ一面のみを力説するけれども、夫は不健全であって、同時に衣食住の問題を解決せしめ給へと祈る心をも含んでいる。また、「我儕の負債」とは、月並の教会では、単に罪惡の一面のみを高調するけれども、同時に借金の解決を意味することは明々白々である。何となれば、基督時代のユダヤ人は、衣食住の問題の爲めに苦み、借金の問題の爲に悩みたることは世界に比類なき事実である。故に基督の如き慈顔愛腸の人は、単に精神の方面よりのみ

らず、肉体の方面からをも救済せんとせられたる事は疑うことは出来ぬ。尠くとも其思想は十分にあったことを認めねばならぬ。然らば乃ち宗教と経済と調和せらる可きであつて、基督教と報徳教とを調和したる、基徳教の起らねばならぬ所以であるとの主張であつた。

石井はかねてから、西欧的なキリスト教に学ぶと共に、東洋におけるキリスト教の在り方に関心を寄せており、二宮の『報徳記』の精神と聖書の教えを触発させた。このことは、石井がキリスト教を相対化し、あるいはそれぞれのよいところを彼が抽出して一つの折衷形態をつくろうとするものではない。二宮の報徳思想の背景から聖書の福音を再解釈しようとするものである。ヨハネによる福音書の記者が、ギリシヤのロゴス思想の理解をもつた背景からキリストの福音を把握したように、日本の伝統的宗教思想を破棄して西洋的キリスト教を鵜のみにするのでなく、尊徳の倫理思想によって培われた土壌のなかで福音を解釈しようとしているのである。こうしたアプローチにはたしかに一つの危険を伴うものである。それは、折衷主義に陥る危険性であつて、大原や石井の場合にその傾向がなかつたとは云い切れない。たとえば、石井の場合ははじめは大原が現代の二宮であるようにという期待をもっていたが、晩年には、「二宮先生は日本のキリストなり」という告白がみられる。元来石井は感情的昂揚の激しい人で、必ずしも論理的分析をしてその結論を語っているのではない。石井はロゴス的な組織神学者ではなく、むしろパトスの実践の人であつたので、冷静な整理検討を経て語っているわけではない。晩年の石井を見ると、天命にしたがつて、勤勉に労働し節儉に励み謙讓をもつて隣人に仕えることを使命としそれを農耕生活の中で生かそうとしている。

天津日の恵み積みをく無尽蔵

鍬で掘り出せ鎌で刈り取れ

という尊徳のうたに感銘し

天父の恵みの満てる茶臼原

鍬で掘り出せ、鎌で刈り取れ²³

とうたっている。これは明治四三年の新年の所感である。ここに、石井十次の茶臼原における生活の姿勢がうかがえる。そこには、かつての外部からの寄付に依存した姿はほとんどみられず、農を中心に自然に親しんで自ら働き、それによって自立の生計を営み、貯蓄に励むという堅実さを備えるようになってきている。職員や院児たちに労働で得た報酬の十分の一を貯蓄させ、かつてとなえていた天国銀行を報徳社と改称し、明治四四年一月には岡山孤児院報徳社を設立し、自ら社長となり、炭谷小梅が副社長となって運営に当たっている。二宮における天道・人道思想をうけいれ、明治四二年一月三日の日記にはこう記している。

「名は仏様でもよし、稲荷様でも、金比羅様でも金光様でもよし、真に山上垂訓にしめされたる天地の真理、人道の真理を信じて実行すれば足れり」といい、さらに、明治四四年一〇月七日の日記には、

○神を信ずるは即ち天国なり

○教会に入る入らぬは別問題なり

○ア、真正の伝道ほど人間を救ふに必要な事業はない

○予の孤児を救ふも人の世話をするも、製糸場の世話をするも、衷心同胞をして天父を稟けしめんがためなり。²⁴

これらの石井のキリスト教理解には、きわめて興味ある信仰の土着化の方向を示していると共に、キリスト教の個有な性格を稀薄にし、普遍的な「信天教」になりつつあるのではないかという問いも当然出てくるであろう。しかし

石井にとつては、キリストが救主であり、それを彼を通して天父を知るといふことはいささかも変ってゐなかつた。石井にとつての関心はキリストにあつて知つた天父の道の普遍性であり、その生命が現代にあつていかなる働きをもつてあらわれているかといふことであつた。

林源十郎（Ⅰ）の生活態度

われわれは林源十郎の媒介によつて、大原孫三郎は石井十次を知るようになり、三者の間に友情が深まり、二宮尊徳の思想を理解し、キリスト者の生き方にそれを積極的にとり入れて実践して行つたことを辿つて来た。果してそれらは倉敷の教会の生活や町の形成にどのような影響を及ぼして行つたかを顧みてみることにしよう。

倉敷教会の歴史の中で挙げられることは、つぎの二つのことである。(一)、倉敷教会の信徒たちは、明治三九年七月教会設立の以前より、会堂建築の希望をもつて貯金をなしていった。明治四四年には、一、八九〇円に達していた。これらは、信徒たちが、その額の大小を問はず、「各自随時に、感奮の至誠より献げ来りたるもの」であつた。これを基礎として進められたのが、新川の仮会堂の建築であつた。(二)、林源十郎（Ⅰ）による禁酒倉の建築である。彼は店では荒けずりの薬をつめる箱の上に座布団をしいて腰かけとし、外に出るときは、信玄袋をカバンとし、下駄は若いときに足を悪くしたので桐を用いていたが、質素な身なりで、どこへでも出かけて働いた。朝は暗いうちにおき、夜はその日の帳簿を整理し日記をつけてから、やすむという、勤勉な生活ぶりであつた。ふしだらさとか、不誠実さといふことは、凡そ見つからない尊徳型のキリスト信徒であつた。大原孫三郎は林源十郎（Ⅰ）の生き方が倉敷の人々に無言の感化となつたことを追憶してこのべている。

林さんを中心に、倉敷地方は何んなに感化されたか知れません。質素勤勞の風格が地方人に与へた感化は実に大

きいものです。倉敷人が営々として働き、質実勤勉な郷風を維持しているのは、何んと言っても林さんの感化が
づかって大なるものがあります。林さんの態度と林さんの努力がもたらした倉敷に対する功績は実に大いなるもの
で、その意味においても、林さんの逝去されたことは、倉敷地方にとって何より大きな損失であると思えます。^②
この点では林 源十郎（I）のなかに倉敷のキリスト教徒の典型をみる事が出来る。彼はあるとき、可成りまと
まった金を倉敷教会に寄付し、それで教会の蔵を建てて、「禁酒倉」と名づけた。その動機をつぎのように説明して
いる。

基督教徒はみな禁酒禁煙、そして道楽もしませんが、そのくせあまり金もできず、かえって世間の、酒ものみ、
煙も吸うし、道楽もする連中がドシドシお金をつくってゆくし、寄付もする。しかるに、基督教信者はまことに道
徳的ではあるが、さっぱり積極性に欠けている。そこで私は信仰の証しのために五年前から貯金をはじめたので
す。食卓に貯金箱を置いて、夕食のとき、きょうの晩酌一本分、煙草一箱分と、かくて五ヶ年の後に積もり積もっ
てこのお金です。これでじゅうぶん蔵が一軒建ちます。

禁酒倉は長い間、林源十郎（I）の勤儉貯蓄の精神の象徴として倉敷教会の敷地の一角にあって無言のメッセー
ジを町の人々に送っていた。昭和四一年創立六十年記念にあたって、倉敷教会会館が建設されることになり、とりこわ
された。しかし、その精神はいまも倉敷教会の中に生きつづけ蘇翁竹中記念館となつて記念されている。

こうした林源十郎（I）にみられるピューリタンの禁欲と節制は、たしかに当時の宣教師たちのもたらしたニュー
イングランド・ピューリタニズムの影響によるものであったことは云うまでもない。^③それと同時に初期の信徒たちが
培われた家庭には二宮尊徳に代表されるようなわが国の道徳思想による訓練がそれぞれ存し、キリスト教的な節制や

規律を受けられる素地を築いた。また、在来の儒教倫理が勤儉貯蓄を説き、それを通して立身出世をはかったのに対して、キリスト教倫理においては、節制・訓練して隣人に仕えることを教えた。

大原孫三郎の祖父に壮平という人があり、かれについてこう記されている。

壮平字は確堂、名を謙受と称す、分家原氏より入て大原家を嗣ぎ、一六才より八十才に至るまで終始渝らず、忍耐と勤儉とを以て産を治め、嘗て家運の傾かんとせるを興し、終に数万の富を致す。性剛毅能く己に克つ、又勤王の志厚く皇居造宮の費を献ず、其他道路の改修・学校或は窮民賑恤等に金穀を出損すること十数回に及ぶ。晩年に至って益富しかも儉素を守り、貧民を救助することを以て樂とせり、明治一五年歿す。

つぎに大原家をついだのが孝四郎で、彼は岡山の藤田家より大原家に養子として入り、二一才のときに家を継ぎ、家訓を守って勤儉貯蓄に励み、家富を増大させた。それによって児童就学の援助をなしたり、有能の青年に学資を与え、人材の育成につとめるなど、社会への奉仕に励んでいる。

青年時代、一時は奔放な生活に陥ったこともあったが、大原孫三郎が、自省自戒して、岡山孤児院の働きを始め、幾多の社会奉仕活動に尽力したのも、石井十次によるキリスト教の精神の影響であると共に、二宮の報徳思想や大原家の代々の家訓の影響がその素地にあったことを忘れてはならない。この点においては、林家の場合はどうであったかしばらく顧みてみよう。

林源十郎は慶応元年二月二八日に林懐徳の長男として生れた。幼名を蘇太郎といった。生れたとき死産ではないかと一時は諦められたが、傍の炬燵に入れてあたためたところ、息をふき返したので蘇太郎と名づけられた。父はその年の七月二八日に逝去したので、主として祖父の孚一の薫陶を受けて成長した。祖父孚一と祖母みち子は幼い蘇太郎

を甘やかさず、さりとて冷たく扱わず、訓育した。倉敷の戸長（明治五年）、区長（明治七年）、そして郡長（明治一年）、をそれぞれつとめ、孚一はすたれかけていた倉敷義倉を再興した世話人の一人で、勤儉力行の士であり、温厚篤実の長者として「翁口ヲ開ケバ概ネ之ニ従ハザルモノナシ」といわれたほど多くの人々の尊敬をあつめていた。朝は家人より二時間早くおき夜は家人就寝ののち二時間習字をなし、数十年日課を怠らなかつた⁶。少し長文であるが、孚一の遺訓として伝えられているものを紹介してみよう。林家に代表される当時の倉敷の人々の家風を知ることが出来ると思う。

一、子女召使を教訓奨励するは主人夫婦の勤惰によることなり。仮初にも安逸を好み、奢侈倨傲の風をなすべからず、狡点の所作は固より軽々しく人を褒貶し、愛憎偏頗の沙汰ある時は家族と雖も蔑視して何事も信ぜざるものなり、言語は殊更に慎み、平素の坐談夜話等にも、忠臣孝子、義人貞婦、奇特者、総てよき人の事のみ語り聞かすべし。

一、親戚は無論朋友知音等の落魄せしは、成るべく助成し、例令無縁の人にも充分の救助をなすべし。但し博徒呑んだくれは説諭すべし。

朋友は道德を旨とする人を選ぶべし。然れども窮屈なるは悪し、君子の交り淡くして水の如しと言へば、むつかしからぬ方よろし、フト一時の心酔する所あるより、頻りに懇親を盡し、又聊かの過誤ありて、意に適せざるより忽ちに疎遠の情をあらはし、甚しきは悪声を発するものあり、浅はかにして見ぐるし、例令富貴に居り、才智芸能人に勝れしも、狡点且つ鄙吝の人を友とすべからず。但し深く交はらざるのみ、町村中尋常の交もなさずと云ふにはあらず、かつ狡点鄙吝も強ち罵撃するは聞くにくし。

一、本分同姓は固より、総て親族を祖先の目より見る時は、内外の別なく同じく分身にして、子孫の末なり、懇情を尽すは勿論の事なるに、やかもすればかの思ひ違ひより、隔意を生じ、不和となることあり、皆倉率にして熟考せず、忍耐の力薄き故なり、その原因を探れば多くは互ひに欲情に出るか、或は婦人の饒舌より種々枝葉を生じ、また思慮なく一家雷同し、擯斥の景況より雪上に霜を加ふるの患あり。

一、女子は他家に嫁する覚悟のものなれど、男子は他家を忌み嫌ふもの少なしとせず、力をもはからずして独立を好むは大いなる過なり、聊かの分地分金を得て、知らず知らず本家同様の交際と成り、忽ち疲弊を來たす、毫も私心なく独立不羈の氣象を以て資本ある家を興起せば、百倍の功を奏すべし。

一、修身齊家の稽古は稚なき時の勤にあり、若し商業を好まずば、農とか工とかに方向を定むべし、おかれて後悔すべからず然れども吏は断じて望むべからず、若し官民の選に預かる時は、己れ世の爲めに成るかを考へ、或は斯の如きの弊を矯る等の見込あるか、また十分益ありとも毫もほこるべからず、我の得意な顔なるは甚だ見苦し、何程の事あるとも立腹すべからず、忍耐の力なくんば勤むべからず、却って災害を設くるものなり、然れども家に障あれば断然辞すべし。

因に云ふ諸の遊芸は贅物なれども、また心を養ふの器械なり、家業の余暇あらば善き友を選び読書、詩文、和歌、俳諧、書画、茶花、謡曲総ての音楽、擊劍、囲碁の類を樂しむは可なり、然れども賭碁は即博奕なり、断じて為すべからず、右の内にて我性の好むものを習ひ置くべし、聊かも芸なくては老後甚だ淋しきものなり、又是れが爲めに業に怠たる等の愚なる所作あるべからず、只だ老後の楽しみなれば呉々も若き時、是に心を奪はれて、人の笑を受くる事あるべからず。

以上書き残したる事堅く守りて、永遠に違はざれば修身齐家疑がふところあるべからず。⁶⁾

幼児は自分の不注意で柱や火鉢に手足を打ちつけて泣くものであるが、そんなときにも、祖父母は、「柱や火鉢が悪いではありません。御前の不注意が悪いのです。だから柱や火鉢に私が悪う御座居ましたと手をついてあやまりなさい」といって蘇太郎を訓した。また、毎朝顔を洗うにあたって、祖父の孚一は洗面器に三分の一しか水を入れなかった、沢山あるからといって贅沢に使う心が乱費や浪費につながるといって節儉を幼いおから身につけさせた。時あたかも明治維新の変革期であり、家業の菓種業も困難に遭遇した上、父源助のあとをついだ叔父欣二と番頭の間仲たがいが起り、事業に蹉跌を生じ、一家は経済的難局に立った。以前は書肆も宮んでいたので相当の書籍もあったが、それらをはじめ金目になる衣類道具類などが誓願寺に運ばれ売立てられた源十郎（I）の一二才のときであったという。こうした中で落胆するのが普通であるが、孚一は孫蘇太郎の希望を入れて京都の同志社に学ばせた。当時、林家には借財があり、家屋敷は新田の植田家へ抵当となっていた。義理がたい孚一は孫を同志社に学ばせるにあたって、蘇太郎を植田家によつて、同志社留学の事情を説明し、その許可を得て京都市行きを許したと伝えられている。⁷⁾

大原孫三郎は、のちに林源十郎の記念会で、源十郎が小さいころから苦勞を経験したことを指適してこうのべている。

「基督信者は、基督教に好意を持つ人を人格者と思ひ、然らざる人を非人格者と見る癖があります。私は、基督教信者としてではなく、人間としての林さんを考たいと思ひます。林さんは若い頃から非常に苦勞せられた方であり、ます。そう云う小事は多分云はれなかつたと思ひますが、非常に苦勞せられた方です。そして謙遜で温和な親切な

方の様ですが、また随分キツイ人でありました。御子さんに対する処などはそうでしたが、また子供さんが多いだけに子煩悩でした。一人の娘さんが亡くなられた時の林さんを思うにつけてもそれを思います。小さい方は基督教で着色された御父さんを御存知でも、真の御父さんを御存知ないと思います、小さい方は、人間としてのお父さん、苦勞せられた御父さんを御知りになる事が第一に大切であります。基督の信者も骨を折って見て基督教が解るものです。でないとは本當の基督教信者とはなりません。聖書を読み、讚美歌を唱うのみでなく真に御父さんの苦勞を知られる事が第一に喜ばれる事だと思えます。これは私が林さんに対して一方ならぬ恩義を感じると同時に林家の将来を祈る気持から申上げるのであります」。

蘇太郎は艱難のなかに忍耐を学び、辛苦のなかに克己勉勵して若き日をすごした。これが彼を鍛えると共にキリスト教信仰受容えの道を備えさせた。

それは平且な道ではなく、荆棘の道であった。大原は、源十郎の若き日の苦勞を知ったからこそ、はじめて彼の信仰によって得た感謝と希望の尊さを理解しようと考えていたのである。

京都、同志社での生活は三年ほど続いた。同志社は創立後まもなく、新鮮な活気に溢れていた。新島襄はまだ健在で、大学設立のために東奔西走、寧日の暇もなかったが、温容な姿で学生たちを薫陶しデビス、ラーネッド、浮田和民、山崎為徳などのすぐれた教師たちが学生たちの教育に熱心であった。若いとき林が新島から直接学んだ教訓は晩年に至るまで長く心の奥底に残っていた。

家事の都合上、同志社を中退し、倉敷に帰るようになったが、之に対して不平がましいことを言わず、むしろ家庭の困難な事情の中にも勉学の機会の与えられたことを感謝し、終生同志社のために尽力するのを喜びとし倉敷地方よ

り同志社に学ぶ人々が続出する先鞭となった。⁹⁾その後暫く家業に従事していたが、明治二〇年、時代の推移と家業の将来を考え、岡山薬学校に入学した。石井十次とは同年輩であり、そのころ石井は岡山医学校の学生であり、岡山教会において、林と相識るようになった。

林 源十郎（一）は、明治二〇年一月八日岡山基督教会において宣教師ローランドより洗礼をうけた。石井は明治一七年一月二日に岡山教会で受洗していた。林は石井の情熱をこめた献身と信仰を尊敬し、石井は林の誠実な人柄を信頼して、終生変らない友情を結んだが、両者の間は、あるときは熱して足繁げく交流したが、あるとき冷却したときもあった。石井日記を子細にみると、大原が一番岡山孤児院の仕事に力を打ちこんでいた二〇代の前半でも、石井は大原に失望したり不満を抱いているときがある。

明治三五年一月七日、石井は午後三時過ぎの列車で倉敷に赴き、大原と林を訪ね、三人で夕食を共にし九時まで語り、一〇時五〇分の列車で岡山に帰っているが、その日の日記にこう記している。

三厘三毛にて足れり、金持は相手にならぬ人は真に神と宝に兼ね事ゆること能はざるなり、予は今晚腹の底まで此の大真理を悟れり。

と記している。この年の三月に大原は岡山孤児院の基本金管理者を引きうけ、両者の信頼関係の強かったころであるが、意見の相違も少くなかったことが察せられる。このときの話の内容が何であつたのかよく判明しない。しかし前後の関係から察すると、石井はそのころ恩師菅忠芳の家の財産問題で大原と林に援助を依頼したものと思われる。林は二月八日、石井を倉敷に招き、大原の家で親しく食事を共にし、ゆっくりと菅家の財政整理問題につきて相談し大原は林のねがいを承諾し、その後、二月一日には菅家のため大原・林の周旋で一、八〇〇円を借用して難局を

越えている。¹⁰⁾

孤児院の経営に四苦八苦していた石井にとっては、事あるごとに大原に支援を依頼している。

博覧会行の費用一〇〇……大原君にねだれ（明治三六年七月一日）

大原君の心裏に基本金一万円を岡山孤児院に寄附する決心を起こしめ玉え……予は本日より精神を集注して無線電信を大原君にかけんと決心す（明治三六年一月二八日）

などと記しているかと思うと、

大原君に対してはこちらから決して何事をも要求する勿れと自戒している。¹¹⁾

大原孫三郎も石井十次も理想主義者であり、共に意気に感じて夢をみる性格であった。それだけに感情の起伏も激しかった。それに比べて林は苦勞人であり、まず他人の意見をきいて自分の考えをのべ、表面においては目立たずひかえ目に、つねに石井と大原の良いところをとり、互いの協力関係を促進する潤滑油の役割りを果たした。

先述のごとく明治三二年いらい大原は林の紹介で石井を知りその精神に共鳴してキリスト教の信仰を受容し、岡山孤児院の仕事を後援するようになった。感情の起伏の激しい両者の間にあって、両者を相補い、相互の意志疎通をはかり、終生変らない協力関係を保つことが出来たのは林源十郎の働きによるといっても決して過言ではない。現在林家に保存されている一二巻にわたる林源十郎宛の石井十次の書簡はそのことを如実に物語っている。明治三九年に大原が倉敷紡績社長となり、実業界の責任をとるようになってから、多忙なため、岡山孤児院から疎遠になりがちであった。そんなときは石井は林に手紙を書き、大原に意見をきいたり、孤児院への支援を依頼したりしている。林に宛

てた書簡のつぎの一節は、石井と大原・林の関係をよくあらわしている。

大原君には別に手紙は差上げざれども始終忘れはいたさず、また君にあげる手紙はツマリ、大原君には秘密でも頭はれるものと覚悟して居るからアゲルも同じことゝ存^アう。

八月一四日晚 九時半 林 大兄 石井⁽¹³⁾

これらの林宛書簡の末尾には大原の名前が連名で記されているが、そうでないときは、「大原君に宜敷申上被下」とか、「大兄小生の誠意を誤解せられざる様、大原兄に御相談を被為度奉願居候」、「大原兄に大兄よりも御礼申上被下候」といった言葉が記されており、林を通して大原に石井の意のあるところが伝えられていたことが明らかである。

林は隠れたるところにおいてみ給う神の存在を信じ、また、「右の手のしていることを左の手に知らせない」という教えを大切にし、隠れたる善行を重んじていた。高梁の順正高等女学校長を長くつとめた伊吹岩五郎は林を追憶して、「林氏は隠れたる聖徒として見て居るものです。林氏は實際表面に出でて事を為す人の様に見えて居ないでしよう」と信じている。質素にして堅実なる方であり、親切にして其親切を人に知らしめざる人であったと言うことは、誰人にも同意せらるる事だと信じます」とのべているのは当を得ていることばである。同じ点を、大原は、「林さんは人知れず尽される方であった」と述懐している。山室軍平は、岡山に救世軍の会館が出来たとき、源十郎が二〇〇円を林源十郎の名で寄付し、あと八〇〇円は無名氏として記して献げたことを想起してこのうのべている。

彼はもう少し語っても、よかったと思はれる程不言実行主義者であった。さりとて彼は嚴格に失せず、快活で冗談も言い笑いもした。林君は純真な日本人として基督の救を受けた人である。彼は極めて有の俛の質朴な野人であっ

た。基督を知った野人であった。⁽¹⁾

これは林の人物をよく言いあらわしていることばである。

石井と大原と林の三者の友情は晩年に至るまで続いた。石井は大正二年一月茶臼原にて病を得て静養中、林にあてて長文の手紙を送り後事を托している。

拝呈、御親切に御見舞状御遣被下難有拝読仕候。此度帰原後は大兄の所謂安心の結果？身体衰弱いたし、時々心臓の変調を来たし何だか変な心地いたし、自覚的にはマダ当分は此世のものと感じ候へ共、或は再会は六ヶ敷やも難計、実は大兄には二十有余年間、兄弟も及ばざる御親交を辱ふし、何とも筆紙にては尽しがたき感謝の念を有居申候。大兄は鮑叔にして、小弟は管仲に御座候。唯々何事にツケテモ御厄介をかけたるのみに御座候。

生前はモトヨリ、死後に至るまで、小弟の家族なり、孤児院なり、大兄の在世中は万事よろしく御願申上候。大原兄にあてたる書面はかねて愚妻に渡し置候故、小弟の感謝の念もかきては有之候へ共、迎も筆にて尽しがたし何卒小弟に代り深く大原兄の御友誼に対し小兄が生前死後感佩仕居候事を申し上げ、御礼被下度願上候。

菅家の事も今日以後は、忠芳君ナリ、坂口氏ナリ、小野寺氏ナリ、有望の方々相揃ひ申候故、小弟は安心仕居候。農銀借入金の手続きも漸く相済み申候由之亦大兄の御かげに御座候。之れにて大原家にかけてたる迷惑の幾分を減ずるを得たるは、小弟の感謝に堪へざる処に御座候。

児島君友子こと幾久敷大兄の御厄介ものに御座候。何卒万事御示導を願上候。右万一の事ありては之までの御友情に対し御礼申上ぐることも出来ず、マタ後事を御願申上おくことも出来ずと考へ申上候間、只大兄一人にて御秘読被下度願上候。

大正二年一月二十三日

石井 十次

林大兄⁽¹⁸⁾

同年四月、児島虎二郎と石井の長女、友子が大原を仲介人として結婚したが、この書簡では両人の指導を林に依頼している。

その年の後半になって石井の健康が悪化したことをきいて、林は石井の恩師であり、岡山医学校長や病院長をつとめていた菅忠芳を伴って、はるばる日向の茶臼原に石井を見舞っている。石井は遠来の師と積年の親友を迎えて言いあらわすことの出来ない励ましと慰めを与えられた。

林の訪問のあとに認めた石井の書簡はそれをよくあらわしている。

謹啓、さて先日は御多忙中万事を抛ち、小弟のため、菅先生を伴いわざわざ茶臼原迄御見舞被下、実に何とも感謝に言葉なき次第に御座候。

此世に於ける唯一の知己、友人の遠来の御来訪は小弟の病氣に対しては無上の妙薬にして、今日にてはもはや病人に無御座候。御滞在中は睡眠薬のためボンヤリいたし、十分に意中を語ることも出来不申、残念にて有之候。昨朝より夢よりさめたる如き感有之申候。明朝より柿原君上倉の筈に御座候故、御出立後の小弟の様子御き被下度。これまでは医者 の 命令に絶対服従いたし候事無御座候へ共、今度は先生と大兄の御友情にて、頑迷の雲をはらはれ申候。小弟は此度の御親切にてかの「ラザロ」がキリストの御訪問にて墓より復活せし真相を悟ることを得申候。復活の力は奇蹟力にあらずして、誠心より迸出する友情の力に在りと信申候。

大兄が唯一言「己れをなげだせば出来ざる事のなきを感じし」と談られしが、天国は蓋しその裏に可有之と感申候。

御出立の日は雨にして、しかも名貫川橋梁破損のため、宮崎に御引返し被遊候事をきゝ案居申候処、御安着の御電報着いたし安心仕候。

絶対静養を命ぜられたる小弟は、いよいよ決心してジョージ・ミューラー師の信・禱・主・義・実・行の決心をいたし候。ア、信・禱・主・義之れ小弟が菅先生に對し、大原兄に對して、唯一の報恩法と存候。

大正二年八月二六日

林 大兄 玉机下

御老母によるしく申上被下度候⁽¹⁹⁾

石井の事業の継承についても、それもまた大原・林の両家の人々の交りと協力によってなされていることを感ぜずにおられない。

倉敷教会の会館の三階の図書室の一隅に石井十次の胸像がある。この胸像は石井およびその信仰と人生を記念して大原・林のはからいによってつくられたものである。⁽²⁰⁾ 徳富蘇峰は大正六年四月二三日、石井の記念銅像除幕式での講演でこういつている。

石井其人は貴君方も承知の通り、幾ら銅像に作り上げても拙い顔は矢張り拙い。決して好男子でもなく、豪傑の相があると云ふのでもない。其風采は高く買った処で、田舎の庄屋以上ではありませぬ。学問があるでなく、字も詰らなければ、文を作るでもなく、別に取柄のある男でない。其石井君に我々が憧憬したのは何ういう訳であるか自

分にも解らない。強いて語を造れば―甚だ如何はしい語であるけれども、まア石井君に惚れたと云うより外にない。……何うも何だか感心して了つたので、及ばずながら石井君の仕事の為に、何か御奉公して見たくて堪まらなくなつたのであります。石井君から頼まれたのでもなく、自分の方から進んで御奉公して見たいと思つた。石井君を知つて以来死ぬるに至るまで、石井君の忠僕の一人と想像して居たのである。……唯石井君の所謂靈妙なる心の力が我々を動かしたのであると申し上げる外に申分がない。

ここでいう石井の「靈妙なる心」とは、キリスト教の信仰に基づいたひたむきな隣人への奉仕の心であつた。大原も林もそれにひかれて、石井の協力者となつたのである。協力することによつて、さらに石井の精神にふれて、学んでいった。そのことは大原や林だけに限られず、倉敷の教会の人々にとつても同様であつた。石井にとつては、倉敷は心のふるさとであつた。彼はそこに慰めのオアシスを見出したたかいのエネルギーを培う交わりとなつていた。同時に倉敷の人々にとつては石井のひたむきな社会奉仕の働きは、信仰の実践の生きた模範であつた。それはキリスト教の信仰は抽象的な理論や形式ではなく、貧しい人々や苦しんでいる人々の中で共に具体的に生きる姿をとることを無言のうちに教えていた。そして、からしだね一粒ほどの信仰があるなら、この世においては不可能であると思われ、することも神の国のはかりからみると、可能になることを彼は如実に示していた。明治四〇年七月一日倉敷教会の設立一周年記念会に石井十次は招かれて感話をのべた。石井はそこで、マタイによる福音書の一六章一三節以下をテキストとして、話しをなしている。石井はそこに教会の基本的な在り方と信仰の告白がのべられているとし、つぎのように語っている。

されば、あなた方にして、若し眞のクリスチャンたらんとするならば、必ずペテロの信仰を信仰とせねばなりません

まい。若ペテロの信仰があなた方の確信となるならば、当然ペテロと同様天国の鍵と、人を繋ぎ、或は釈くの特権をキリストより受くべきではありませんか。実は倉敷一万有余の人々を自由になすべき大なる義務と特権は、すでにあなた方に与へられて居る事を私は信じます。然るに尚あなた方を尻込みしなざるならば、其処にクリスチャンの生命は滅びつつあるのです。それは私共は真に私共自身をかへりみる時に、実に力弱く信薄き事感せず居れませぬけれども私共は私共自身が、尊い価値があり、エライ力があるといふのではない。主の命令であります。一度一警察官が、なほいかなる人をも繋ぐの権ある如く、私共は神様よりの直接命令を受けた精神界、靈界の一憲法、一巡査として大いに遠慮なく働くべきではありませんか。⁽²⁾

あの石井の銅像はいまも倉敷の教会の人々に語りかけている。「この町には、真実な道を求める人が沢山いる。神はいまも働いておられる。あなたがたも遠慮なく、ズンズン働くべきである」と。

本稿は主として明治期における大原・石井・林の三家の交わりについて記したもので、さらに大原が支援した児島虎次郎と石井の長女友子との結婚における三者の關係や、大原家と林家のその後の關係などが辿られると思うが、後の機会に譲ることにした。何事もふさわしい評価をなすには、いささかの時の経過をまっけて全体像をとらえることが必要であると思うからである。

しかし、明治期の三家の關係についていうなら、キリスト教を媒介にしてきわめて密接な關係にあり、それが単なる文明開化の装をもった外来宗教への好奇心をもった趣味的な交わりではなく、また表面的なつきあいでもなく、それぞれの人々の弱さや、みにくさに触れてそれらを強め、清めてゆく親味な交わりであったことを知ることが出来る。

さらにその交わりは、とかく宗教的小グループがおちいりがちな内面的小グループとして社会に対して閉鎖的にならず、むしろ宗教的な交わりを媒介にして、社会にそれぞれの事業や活動を通して積極的に励んでいったことを指摘することが出来る。彼らは少数者には違いなかったが、社会から隔絶した少数者ではなく、また逃避した少数者でもなく、また社会にへつらって迎合し、妥協した少数者ではなく、創造的な働きを社会にあつてなすために苦闘した少数者であつたということが出来ると思う。

さらに彼らの交わりの中心にキリスト教が存在していたが、それは外来のものであると同時に、旧来の日本的な文化や精神を否定するものでなく、それらの素地に播かれた種として、成長していったものであることを知ることが出来る。彼らの中において日本的な文化とキリスト教はいまだ明確に整理されていなかった。むしろあるときは、混沌としており、あるときは緊張のなかにあり、あるときは一体となつていた。日本人であるということ、キリスト者であるという問いは不可分のこととしての日常の生活の中に宿つていた。これらの課題はまさに現代も問われている問いであり、われわれは日本の教会の歴史的過程の分析において、さらにきわめてゆきたいと思う。

注 同心戮力

- (1) 西毅一、徽山と号して儒学者、明治のはじめ中国に渡り、儒学を学ぶ。父の死に接し、一年のち帰国、岡山に源泉学舎をおこし、ケイリなど外人宣教師を採用し岡山の文教を盛んにした。関谷巽が廃校になると聞いて、そのあとをひきうけ源泉学舎の塾生をつれて関谷に移り、教育に励んだ。明治二年国会が開かれ、第一回の国会議員として、笠岡の坂田警軒（興讓館長）と共に当選、儒者議員となる。二回目も当選したが、第三回目からは立候補しなかつた。条約改正の経過に憤慨し、剖腹自殺して天下に警告して死す。明治三十七年三月二十九日逝去。

- (2) 林源十郎(一)、同心戮力、田崎健作編、『林翁之片影』昭和二年、一一四―一五ページ。

- (10) 岡山県知事 松垣
- (11) 『石井十次日記』、同日の欄外記事。
- (12) 『石井十次日記』、明治三十六年二月二〇日の条。
- (13) 同前
- (14) 『石井十次日記』、明治三十五年二月二四日の条。
- (15) 『石井十次日記』、明治三十五年一月二五日の条。
- (16) 金森通倫は熊本バンドの一人であり、同志社の第一回の卒業生である。卒業後岡山教会の牧師となり、その後同志社にて教鞭をとり「新神学」に傾き、フライデルルの『宗教哲学』を訳して『自由神学』の題名で出版したりした(明治二五年七月)。その後、明治三年から大正二年まで貯金運動のため尽力、明治四二年からは内務省の囑託をつとめ、貯金運動推進のため、全国を遊説していた。
- (17) 『石井十次日記』、明治三十五年一月二六日の条。
- (18) 『靈潮』、明治四四年六月号(高橋虔「宮川経輝と金森通倫―信仰と人間」、同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究』三二六ページ所収)。
- (19) 前掲高橋論文三二七ページ。なおこの書簡は日本基督教団茅ヶ崎教会高戸竹二牧師所蔵のものである。
- (20) 『石井十次日記』、明治三十五年二月九日の条。
- (21) 西内天行、『信天記 石井十次詳伝』警醒社、大正七年、六〇二―六ページ
- (22) 柴田善守、『石井十次の生涯と思想』、春秋社、昭和三九年二〇一ページ。
- (23) 西内天行、『信天記 石井十次詳伝』六二六ページ。
- (24) 柴田善守、前掲書、二〇五―二〇六ページ。

林源十郎(一)の生活態度

- (1) 『倉敷教会略史』八五ページ。
- (2) 『林翁之片影』七一―八ページ。
- (3) 拙稿『ニューイングランド・ピュリタニズムと日本伝道』(同志社大学アメリカ研究所『Doshisha American Studies V』)参照。
- (4) 『倉敷市史』(名著出版)第一〇冊、八三二―八三三ページ。

- (5) 『山川均自伝』一〇八ページ。
- (6) 『林翁之片影』二七一三〇ページ。
前掲書、三七ページ。
- (7) 前掲書、五四ページ。
- (8) 前掲書、五四ページ。
- (9) 弟の周平、甥の山川均(中退)をはじめ、大橋朝野、大森茂一郎(在学中明治一九年死亡)、溝手文太郎(明治三年)、垣見敬男(明治二年)、露無文治(明治四年)、津下紋太郎(明治六年)などが倉敷から、岡山・天城地方を含めると大西祝(明治七年)、加藤寿(明治八年)、原忠美(明治二年)、剣持省吾(明治七年)、このほか、作州の小松鉄一郎も明治一八年から一九年にかけて、同志社に学んだ。
- (10) 『石井十次日記』、明治三四年二月八日一日の条。
- (11) 『石井十次日記』、明治三六年一月二一日の条。
- (12) 林幹子家所蔵『石井十次書簡』(帖本仕立、一〇巻ノ一〇。
マタイ六・一六一―一九。
- (13) マタイ六・三。
- (14) 『林翁之片影』六三―四ページ。
- (15) 前掲書、五三ページ。
- (16) 山室軍平、「林君を通じて見る信仰」(『林翁之片影』二二ページ)
- (17) 小野田鉄弥、『石井十次伝』、二四九―二五〇ページ。
- (18) 『石井十次伝』二五―二六ページ。
- (19) 『信天記』七七―八九ページ。
- (20) 『信天記』七七―八九ページ。
- (21) 『信天記』七七―八九ページ。
- (22) 『倉敷教会略史』六〇ページ。